

軽い気持ちの代償

会社員（30代）

私の人生は山も谷もなく、幸せを一つ一つ積み重ねていく、そんな日々だったと思います。当時の私は会社員として支店を任せられ、糾余曲折はありましたが、社会や地域に貢献していました。恋愛の末の結婚、子供も2人授かり、念願のマイホームも手に入れました。そんな日々の中、仕事の後のお酒も幸せを感じさせてくれる時間でした。ましてや気の知れた友人達となら尚更でした。駆け付けのテキーラから始め、その日の気分でお酒を楽しんでいました。お酒を飲み終わるのが夜遅くなる事もしばしばあり、運転代行やタクシーを呼ぶもなかなか掴まらず、翌日の仕事を考え、自分で運転して帰ることが何度もありました。一度、二度でもやつて良いことではありませんが、慣れというのは怖いもので「飲酒運転でも、いつも通り運転出来る。」「深夜なら人も歩いていないから安心。」とさえ思っていました。

その日もいつもと同じ様に飲みに行こうとしていたところ、妻から電話がありました。「今日は早く帰れる? 子供達も待っているよ!」と伝えられると、電話の後ろからは「パパ!」と子供達の声も聞こえました。その声を聞きつつも友人と約束をしていたため、「少し飲んで帰るよ。」と話し、電話を切りました。その後、駆け付けのテキーラから気が付けば午前1時を過ぎ、いつものように自宅へと車を走らせました。

「裏通りで帰れば検問もやつていらないし大丈夫。」と考え、一方通行の道を走りました。心地良くなりボートと走っていると、突然「人だ!」と思うと同時に被害者の方と接触してしまいました。ブレーキを踏み、速度を落としながらサイドミラーで確認すると、自転車が倒れていきました。私は全てを失うのが恐ろしくなり、車を停めることもせず、ゆっくり車を走らせました。その間、恐怖心と理性の問答が繰り返され、およそ300m離れたところでようやく停車させ、歩いて現場に戻りました。「怪我で済んで欲しい。」「人でなければ。」そう願つていきましたが、現実は男性が身動き一つしない状態で倒れていました。

後日、保釈が認められ、自宅に帰りましたが、そこは家族のいない私独りだけの空間でした。机の上には離婚届だけが置かれていました。職場にも電話しましたが、対応もよそよそしく、そのまま退職し、私の犯した罪の大きさを実感しました。

この時までの後悔、戒めの気持ちを謝罪文として手紙にし、被害者御遺族の方に送らせて頂きましたが返信は来る訳もありません。裁判が始まり、初めて被害者御遺族の方と対面させて頂きました。頭を下げ謝罪しましたが、被害者御遺族の方には私の事など映つておらず、愛する家族を奪われ、生氣を失っているように見えました。

判決は懲役3年の実刑でした。事件当日、家族の声に従つていれば、被害者の方の尊い命も被害者御遺族の方の哀しみも私の家族も仕事も何もかも失うことはなかつたと今さらながら後悔し続けています。数えきれないくらいに長く感じる年数が経ちましたが、事件当日から家族に会うこととも、声さえ聞くこともできなくなりました。

世間では飲酒運転の撲滅に努めているのは知っていますが「私は大丈夫。」そんな軽い気持ちでいました。一生償えない罪を背負い、被害者の方の人生を無残に終わらせ、被害者御遺族の方には今までの暮らしを一生戻せない程の悲しみを与えてしました。それが軽い気持ちの結果です。

出典：千葉県警察「飲酒運転の代償（飲酒運転受刑者の手記）」
<https://www.police.pref.chiba.jp/kotsusomuka/konetsu.html>

みんなでなくそう、島根の飲酒運転。

